

東北大学災害科学国際研究所主催シンポジウム「東日本大震災から10年とこれから」を開催しました（2021/3/7）

テーマ：東日本大震災から10年、災害研のこれから
場所：仙台国際センター展示棟、WEB 同時配信

2021年3月7日（日）午後1時から4時まで、仙台国際センター展示棟で開催された「仙台防災未来フォーラム」の会場内において、当研究所が主催するシンポジウム「東日本大震災から10年とこれから」を開催しました。このシンポジウムは、震災発生から10年、震災の翌年に発足した当研究所の9年間における各研究部門・分野の研究と活動のあゆみをご説明するとともに、今後10年の本研究所への期待や活動の展望を行政、マスコミ、連携研究先のゲストと若手研究者などが話し合う機会として開催したものです。

当日は、新型コロナウイルス感染症の感染予防に十分配慮しつつ、会場での参加者の人数を限定するとともに、WEBでも同時配信を行う形で実施しました。当日は会場に80名、WEBで114名のご参加をいただきました。本シンポジウムの内容と登壇者の方々は以下の通りです。

- ◆開会挨拶、趣旨説明 今村 文彦 所長（災害リスク研究部門）
総合司会 中鉢 奈津子 特任准教授（広報室）
- ◆第1部 「災害科学国際研究所設立後の実績と今後10年」
 - <工学・理学> 寺田 賢二郎 教授（地域・都市再生研究部門）
 - <医学> 児玉 栄一 教授（災害医学研究部門）
 - <人文社会> 奥村 誠 教授（人間・社会対応研究部門）
 - <教育・情報> 佐藤 健 教授（情報管理・社会連携部門）
- ◆第2部「災害科学国際研究所の今後の10年への期待」
 - <ゲスト> 菅原 茂 氏（気仙沼市長）
飯田 和樹 氏（ジャーナリスト）
溝口 敦子 氏（名城大学教授、当研究所教授（クロスアポイントメント））
 - <意見交換> 越村 俊一 教授（モデレーター、災害リスク研究部門）、
今村 文彦 教授、泉 貴子 准教授（地域・都市再生研究部門）、國井 泰人 准教授（災害医学研究部門）、佐藤 大介 准教授（人間・社会対応研究部門）、
福島 洋 准教授（災害理学研究部門）、マリ・エリザベス 准教授（情報管理・社会連携部門）
- ◆総括・閉会の挨拶 丸谷 浩明 副所長（人間・社会対応研究部門）

第1部の発表では、当研究所の各部門・分野の研究の実績と今後10年の展望を、工学・理学、医学、人文社会、教育・情報に区分して4名の教授から簡潔にご説明しました。また、第2部では、まず、ゲストから当研究所への今後10年の期待を述べていただき、気仙沼市長の菅原様からは「予報のビジュアル化・可視化、精度・信頼性の向上」などを、ジャーナリストの飯田様からは「一人ひとりの日常を幸せにする研究所に」などを、連携研究先の名城大学の溝口教授からは「スペシャリストのバランスの取れた連携」などを期待するとの発表がありました。続いて、研究担当所長補佐をモデレーターに、当研究所の今後10年を担う各部門の准教授のメンバーから研究や社会活動について発表し、ゲストとともにディスカッション行いました。最後の総括では、当研究所の研究者が中心に分担執筆した『東日本大震災からのスタートー災害を考える51のアプローチ』の発刊の紹介も行われました。

（次頁へつづく）

災害科学国際研究所は、来年度の部門再編で、3つの研究部門、1つの防災実践部門の体制となります。東日本大震災発生後 10 年の節目を経て、研究及び実践のさらなる展開をめざしています。

本シンポジウムの準備・運営は、東日本大震災シンポジウム2020年度 WG（丸谷、今村、越村、榎田、佐藤翔輔、中鉢）が担当しました。

文責：丸谷 浩明（人間・社会対応研究部門）



会場の様子（第 1 部）



会場の様子（第 2 部）



会場の様子（意見交換）



会場の様子